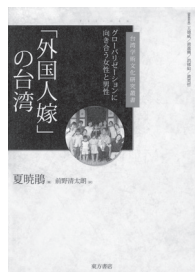


夏曉鵬著 前野清太朗訳

「外国人嫁」の台湾

——グローバルゼーションに向き合う女性と男性

東方書店／2018年8月／420頁／4500円＋税



日野みどり

本書の概要

本書は、二〇〇二年に台湾で出版された『流離尋岸——資本国際化下的「外籍新娘」現象』（夏曉鵬、《台湾社会研究》雑誌社）の日本語訳で、黄英哲・洪郁如ら日本で活躍する台湾人研究者および台湾やアメリカ在住の研究者らの企画による「台湾学術文化研究叢書」シリーズの一卷である。原書は著者・夏曉鵬が一九九七年に米・フロリダ大学に提出した博士論文をもとに刊行された。

本書の題材は、一九八〇年代後半以降から九〇年代の台湾で東南アジアからの「外国人嫁」が増加した現象である。注意すべきは、研究対象は「外国人嫁」ではなく、「外国人嫁」が増加した現象をめぐり台湾社会の各方面がどのように反応しているかという過程を構築してきたか、という過程を対象としている点である。同時に、この国際結婚現象は当事者たちの個人的営為であるにとどまらず、資本のグローバル化に伴って生じた政治経済構造の副産物であることが論じられる。

本文の構成は以下の通りである。

- 第一章 イントロダクション——用語・伝記・学術・実践
 - 第二章 探索への道
 - 第三章 真実の社会的構築——公的理論の構築
 - 第四章 真実の社会的構築——アイデアンティティの構築
 - 第五章 真実の社会的構築——マスメディアによる構築
 - 第六章 資本のグローバル化と商品化された国際結婚
 - 第七章 識字の教室、姉妹の教室
 - 第八章 課題・情勢・展望
- 日本語版のための補章

この他、本文の前に「日本語版序文」「序（ジョー・R・フィーギン）」「自序」が、巻末に「訳者あとがき（前野清太朗）」「解説 台湾の結婚移民現象に関する夏曉鵬のポジション（横田祥子）」がある。

第一章は、本書における著者の目論見

並びに研究対象に向き合う姿勢が表明される重要な章である。前者の目論見について曰く、「本書がめざすものは商品化された国際結婚に対する理論的な分析枠組みの構築である。まず国際結婚がいかにして各種の「参与者」に理解されているかにつき述べる(中略)。続けて彼らの理解・解釈がいかなる構造的文脈のもので形成されているかについて論じる。

(中略)最後に筆者はまた上に述べたような商品化された国際結婚が国際的な政治経済の不平等構造によって不断に複製・強化され、循環しうる可能性について検討する(七頁)。後者の研究対象に向き合う姿勢については、著者は「外国人嫁」と自己のライフヒストリーとの間に類似性を見出すにつれ、研究対象を「他者」と位置付けてその客観的分析に徹する——研究者としてかくあれと訓練を受けてきた——当初の姿勢を省みて、これを否定する。そして、「ラディカル経験論」(二四頁)に依拠し、「みづから身を置く(getting personal)」存在となり(二九頁)、そして「社会学的な自省」す

なわち「自己のライフヒストリーを弁証法的にとらえ」「批判的に自己と研究対象とを検討し」、「自省をさらに行動に移すこと」(三四頁)が自分の立場だと宣言する。

第二章は、研究の概要と方法論、およびフィールドである高雄県美濃鎮の概要である。特に、著者が社会運動の一部と位置付けて採用した実践的研究の理論と方法が示される。続く第三・五章では、「外国人嫁」現象をめぐる言説がいかに構築されたかという問題意識に沿って、第一章に挙げられた各種の「参与者」の立場から記述と分析を行う。すなわち、第三章では国際結婚現象を「問題」と見なす行政担当者の、第四章では当事者である「外国人嫁」・台湾人の夫たちとその家族の、第五章では行政の見解に追隨してこの「問題」を報じるメディアの、それぞれの言説を詳述する。これらの章の見出しには「真実」「構築」の語が繰り返し掲げられるが、「外国人嫁」現象をめぐる言説やまなざしに着目しそれらを解釈・分析する社会構築主義の立場か

ら「真実なるものは作られる(構築される)」という主張を込めたものと評者は理解した。

第六章は、前三章のミクロな視点から一転して、一九八〇年代以降の世界経済の大潮流についての議論である。この時期に資本のグローバル化が進展し台湾がそこに組み込まれた過程をマクロに概観し、それこそが「外国人嫁」現象の背景となったと著者は指摘する。具体的には、世界システムの内部に「半周辺—周辺」の台湾—東南アジア関係が形成される過程で、双方の社会で貧困化する階層に結婚難の問題が生じ、結婚移民仲介はその需要に因應べく発展したという(二一九—二二三頁)。その意味で、商品化した国際結婚の本質とは世界経済システムにおける中心・半周辺・周辺国家の不平等な分業関係が個人間の不平等な社会関係およびジェンダー関係として実体化されたものであり、「国際結婚は資本のグローバル化の影なのだ」と著者は論じる(二五〇—二五三頁)。

第七章は再びミクロの視点に戻り、美

濃鎮で著者らが一九九五年から展開した「実践的研究」としての社会運動の詳細を記す。「外国人嫁」のエンパワーメントを目指して開設した「外国人嫁識字教室」は、中国語学習を入りに、彼女たちが自ら声をあげ、組織し、権利を獲得するためのプログラムを開発・実践した。本章はその一部始終を記述し、この実践が「外国人嫁」たちと家族に、そして地元コミュニティに、ひいては台湾社会にもたらした変化や影響を分析する。さらに、ブラジルの革命主義教育家・哲学者フレイレの理論に依拠したこの運動の目的について「台湾社会に対する適応能力を高めて同化をめざすものではない」（二六〇頁）く、「批判的に自己の境遇と構造との関係をとらえ、現状を変革していく能力を養っている」（二八九頁）くことだと述べる。

第八章は総括である。国際結婚現象に向き合う際に、台湾のエリート階層が奉じる「文明的」「西洋的」な個人主義イデオロギーは当事者の助けにならないばかりか「劣った他者」「優れた自己」と

いう誤った認識の構築を助長するとしてこれを批判する。そうではなく、経験に基づく「関連性」「横断性」に着目することが「自己」と「他者」の合一につながる」と論じる。

原著の本文は以上だが、本書ではこの後に「日本語版のための補章」が続く。原著の刊行から十数年が経過した近年の台湾社会における国際結婚の実情、外国人労働者の導入をめぐる状況、および著者らによる社会運動のその後を概説し、日本の読者に最新の情報を提供している。

本書の意義、若干の議論

一読して、議論にはいくつもの重層的な構造が作られていることに気づく。それらが有効に機能し、議論の説得力を増している。

重層性の一点目は、グローバルな資本主義およびそれが各国・地域社会にもたらす政治経済状況と、そこに生きる個人の人生とが交錯する状況を見抜き、その実態を描き出していることである。台湾

人男性と東南アジア女性の商業的国際結婚という「現象」に着目したことが、大きな政治経済的構造と個人の人生における選択の間にある切り離せない関係を見破る第一歩であった。国家間の不平等な分業関係と個人的関係・ジェンダー関係との連関についての指摘（二五二―二五三頁）は、商業的国際結婚をめぐるマクロとミクロの共振関係を巧みに捉えている。

第二に、国際結婚をめぐるマクロな政治経済的構造の理論分析と、「外国人嫁」たちの生活の場に根ざすエンパワーメント運動の民族誌的記録とを並走させる構造も、重層性を成し、同時に本書の重要な論点となっている。著者は両者の関係を「社会運動はグローバルな政治経済構造が生んだ不平等な個人関係を断ち切る手段として不可欠だ」とし、世界経済システムを扱う第六章から運動の実態を詳述した第七章へと効果的に議論を進めている。

三つ目の重層性は、研究対象である「外国人嫁」と研究者である著者自身を

重ね合わせる姿勢である。著者はこの研究で「外国人嫁」たちとの接触を深める過程で、自身の家族関係をめぐる葛藤、国際結婚した母の友人をめぐる記憶、客人人として台湾における差別の構造に気づいた経験、アメリカ留学時に言語の問題などで周縁に置かれた経験など自身自身の物語に思い至り、外国人嫁たちの台湾での周縁的な立場とそれら物語の相似性、ひいては研究対象と自身の共通性を見つめている。各章節の冒頭に著者自身の経験を振り返る内容が挿入されるのは特徴的で、筆者はこれにつき「自身の立場を非客観化（非特権化）するよう努めるため」（三一頁）と説明しているが、研究者として研究対象といかなる関係を築くべきかという命題が著者にとつていかに重要であるかが窺える。この再帰主義的な姿勢は九〇年代の社会科学の潮流を象徴するものだが、それは研究対象への単なる共感・共鳴ではない。研究者は研究対象に対する暴力性に自覚的である必要がある、従って研究という営為を通じて研究者が研究対象と関わることは常

に緊張を伴うとの考え方である。そして、著者はその点にすぐれて自覚的である。

最後に、著者は研究対象の「客観化」「他者化」にきわめて慎重であり、また個人主義イデオロギーにも批判的であるが、これに関する記述にも重層性が見られる。つまり、学術上の問題として客観化・他者化批判（「優れた西洋文明を体現する研究者」が「劣ったアジア」を研究することを疑わない価値枠組み）と個人主義批判（西洋的な個人主義の価値基準をアジアの事例研究に適用する誤謬の恐れへの警鐘）を行い、他方、台湾社会に対しても、客観化・他者化批判（東南アジアに対する「劣ったアジア」観、「優れた自己」たる台湾人対「劣った他者」たる「外国人嫁」の認識）と個人主義批判（商品化された国際結婚を忌避する台湾人のロマンチッククラブ信仰）を展開している。二組の批判は相似形を成し、学術研究と社会実践を両輪で行ってきた著者らしい切れ味を示す。

このようにいくつもの重層性が織りな

す本書の主張は、評者には説得的である。ずれた反応かもしれないが、著者の論点を追ううち、「自己責任」の語が思い浮かんだ。新自由主義の台頭とともに近年の日本でも盛んに言われる「自己責任論」は、肯定論・否定論相まって論争を招いているが、「個人主義イデオロギーは社会の周縁部にいる人々との連帯につながらず、彼らを孤立に追い込む」との著者の議論に沿って捉え直すなら、この「自己責任論」もまた、人間の営為に対して過度な個人主義を読み取った未

に生まれた負の産物なのかもしれない。引き続き、評者の関心に基つき若干の感想を述べる。社会運動を支える理論分析は興味深い。評者がかつて、一九七〇〜八〇年代の香港で大学生が行った青年労働者向け「学校」運営の運動について研究した²³。これと比較すると、著者が組織した教室は洗練された理論の蓄積に依拠しており、著者らはそれを背景に現場で試行錯誤を重ね、プログラムを開発・改善していったことがわかる。また、著者の運動は批判的認識の獲得と変革を目

指すアドボカシー活動であるが、評者が日本で関わった南米日系人子女向けの学習支援団体を思い起こすと、両者の志向の違いに気づく。この団体は当初、公立学校や地域社会で疎外される日系小中学生の「居場所の提供」に努めていたが、その後種々の経緯を経て「基礎学力の定着・向上を通じて日本社会で必要な競争力を獲得させる」方針に転換した。子どもたちのエンパワーメントを目標に据えたとは言えるが、アドボカシー機能ではなく公教育を補完するサービス機能を通じてのエンパワーメント戦略である点が、著者の運動とは明確に異なる。

また、「他者」から「私たち」へ（二七五―二七六頁）という変革は、周縁部にいる人々の支援活動においてきわめて重要であり、著者らが挙げた成果はすばらしい。だが、一般論としては「言うは易く行うは難し」なのも現実であろう。行政ないしNGOなど非行政の実践者の力の発揮が不可欠であり、往々にして非行政セクターの行動力によるところが大きいかもしれない。本書が取り上げた台湾

の経済発展・国際政治経済関係の変化・資本のグローバル化が進んだ時期は、台湾における政治の民主化・言論の自由化・社会運動の自由化が進展した時期と重なる。その意味で、「外国人嫁」現象は大潮流の中で必然だったかもしれないが、彼女たちとの連帯の運動が興ったこともまた必然だったと言えよう。

二〇二〇年、台湾は新型コロナウイルススへの対策の見事さで世界を刮目させた。その成功要因の一端として、市民が政治に高い関心を持ち、政権・政策の監視や意見表出を怠らないことが政権に緊張感を保たせたとの評価がある。周知のとおり、台湾の政治が急速な変化を遂げ民主化を実現したのは、わずかこの三〇年あまりのことに過ぎない。一九八七年までは独裁政権が戒厳を続けており、二大政党制の状況が出現したのは二一世紀に入ってからである。一九九〇年代は、八〇年代末期に勃興した各種市民運動がさらに高揚した時期で、社会の多様な成員が声を上げ始めたことは自由な発言の空間を得た台湾の姿を象徴する。本書の

著者が一九九五年に始めた「外国人嫁識字教室」の運動はこうした機運の好例であり、現在の台湾社会が市民の声をより尊重する社会に変容を遂げる上で寄与したであろうことが、本書から伝わってくる。

こうした感想とともに、研究者として再帰的な姿勢を自らに課しつつ社会変革の当事者の役割を担う著者の「熱量」を感じさせる著書である。著者もまた、グローバル状況の時代の一個人として、自らの場所で自らの職業を通じて研究対象に向き合いつつ、自らの生を生きている。本書に付された三本の序文、訳者あとがき、横田祥子氏による解説が、本文を適切に補っている。特に横田氏の仔細な解説は読者の理解を助けるであろう。最後に、無理を承知で注文を付けるなら、「索引」が三九項目のみなのは残念である。情報量の豊富な著作であるだけに、採録数がもう少し多ければと惜しまれる。

- 〈1〉中国語では「外籍新娘」。差別的な含意がある。二〇年余を経て、台湾行政当局はこの語を「外国籍配偶者」に、さらに「新住民」へと改称した。著者によれば、この過程は民間団体の呼称変更運動に由来する。なお、著者は一九九五年に「外国人嫁識字教室」を立ち上げたとき、語の差別性にもかかわらず敢えて括弧付で「外国人嫁」を用いた理由として、当時の台湾社会がこの語で結婚移民女性を認識していたこと、著者は結婚移民女性の主体性の形成を重視し、当事者自身が命名の権利を持つべきと考えていたこととの二点を挙げる(三四三―三四五頁)。
- 〈2〉日野みどり「一九七〇―八〇年代香港の青年運動——『新青学社』とその活動を通じて」『現代中国』第八一号、二〇〇七年、一〇七―一二〇頁。